

心と刹那相應となり」と本文にある通り、外界の刺戟によつて、刹那刹那に生じ起つたものであります。その根本となつてゐる無明は、無始以來、つまり始めから心の中にあるものだといふ意味で、心不相應といつたのです。

要するに、この所に掲げました一節は、あらゆる煩惱の根本は無明である。四住地の煩惱といはれる、見思の二惑は、一切の煩惱の所依ではあるが、もう一つその奥に無明といふものがある。この無明こそ、一切の妄想、煩惱が起る根で、その無明のもつ力は、實に偉大で、たうてい他の煩惱の比ではない。譬へていへば、ちやうどあの欲界第六天の魔王波旬 (Māra) のやうである。彼はおのれの魔の眷屬を使役して、正法の弘通を妨げ、人の正法に入るのを極力妨害するのであるが、無明は實に波旬の如く、煩惱の王である。その煩惱の王である根本無明を退治しないかぎりには、どうしても他の煩惱を除き去ることはできない。しかも、それは阿羅漢や辟支佛の人たちではできないこと、佛の菩提智によつてのみ始めて可能である、といふことをいつたものであります。

世尊。また取を縁とし、有漏の業を因として、三有を生ずるが如く、是の如く無明住地を縁とし、無漏の業を因として、阿羅漢と辟支佛と大力の菩薩との三種の意生身を生ず。この三地と、彼の三種の意生と、身生と及び無漏業の生

とは、無明住地に依りて、縁となることあり。縁となること無きに非ず。この故に三種の意生身と、及び無漏の業とは、無明住地を縁とするなり。

世尊。是の如く、有愛住地と數と四住地とは、無明住地の業と同じからず。無明住地は、四住地を離るるに異り、佛地の所斷なり。佛菩提智の所斷なり。何を以ての故に。阿羅漢・辟支佛は、四種の住地を斷すれども、無漏盡きざるを以て、自在力を得ず。また證を作さず。無漏盡きざるは、即ち是れ無明住地なり。

石中に火あり。打たざれば發せず。人中に佛性あり。修せずんば顯はれず」

火あり といふことばがある。たしかに考へさせられる聖語です。まさか石の中に火があるなどとは誰も考へませぬ。しかし、石を打てば火が出ます。石と石と相撃てば火花が散ります。われわれのやうな凡夫のなかに、まさか佛性があるとは考へられませぬが、しかし、知ると否とに拘らず、ちやんと生れつきに、先天的に誰でもみな佛性を具へ有つてゐるのです。だが、「修せずんば顯はれず」で、ただ、有つてゐるといふだけではだめです。つね日頃の修行、つまり訓練、鍛錬によつて、本來具有してゐるその佛性を、顯はさなければ何にもなりません。ほんたうに、「石中に火あ

り。打たざれば發せず。人中に佛性あり。修せざれば顯はれず」です。

朝餼

ところが一口に修行といひますが、それはなかなか骨です。ちつとやそつとの修行では、

夕鍊

容易に佛性を顯はすことはできないのです。しかし、倦まず、撓まず、いはゆる「朝鍛夕

鍊」——朝に鍛へ夕に鍊るといふ覺悟で、幾度も幾度も、くり返して鍛鍊してゆくうちに、自然に

いつの間にか佛性は顯現するのです。

「汝等もし勤めて精進すれば、則ち事として難きものなし」

と、釋尊も誠に説いておますが、たしかにその通りです。一度や二度の修行で、佛性を磨ききつて、すつかりさとりを開かうなんて、もとより無理な話です。所詮、行とはくり返しです。一心にものごとをつづけてやることです。つまり不斷の努力です。鍛鍊です。訓練です。「さとりの道は自覺と努力なりこれより外に妙法はなし」です。

チンて

修行といへば、いかなる修行にも三つの心構へが大切だと思ひます。三つの心構へと

三年

は、苦心と熱心と決心とです。この三心なしには、斷じてものは成功しませぬ。

文樂といへば日本の古典藝術の粹であります。あそこに七十五歳の鶴澤道八といふ有名な三味線弾きがゐます。いつか、その道八の藝談を、何かで讀んだことがあります。その中にこんな面白い話がありました。それは「チンで三年」といふのです。以下は道八の藝談です。

「私は「チン」といふ音一つで、三年も苦勞しました。それは誰方も御存じの「酒屋」です。お

團が半七のことを考へて「今頃は半七さん、どこにどうしてござらうぞ」といふところでおます。その「今頃は半七さん」でチンと一つ弾きます。この私のチンを、師匠の名人團平は氣に入らないです。幕がしまつて、師匠の部屋に挨拶に行くと、必ずそのチンのお叱言です。といつて、斯う弾いてみると、教へてくれるではありません。ただ、あかん、いかんと叱るばかりです。いつたい、どないに弾いたらいいのだらうと、そればかり考へてゐます。それでゐて「酒屋」が出るたびに叱られるのです」

かうして道八は師匠に叱られながらも、いろいろと自分で工夫し苦心しました。チン一つで叱言をいはれることまる三年。ところがある寒い冬の晩です。彼は讃岐丸龜の宿で、たうとう行詰つて工夫がつかなくつたそのチンを、不圖した機會でさとることができました。

「寢静まつた夜の空氣を破つて、ポツンと一つ井戸の釣瓶の水が落ちました。それはなんともいへぬさびしい音でした。はつと思つて、早速、三味線をとりに出しました。そして今しがた耳にしたばかりの淋しい響をさぐりました。あれか、これかといろいろ工夫しました。

次にまた「酒屋」が出たとき「今頃は半七さん」の後のチンを、丸龜の宿でさぐつた弾き方で、チンと弾きました。幕がしまつてから、師匠の部屋へゆくと「御苦勞」と一言あつて、後は何にもいひません。いつものお叱言がないんです。實にもの足りない様ですが、それで私のチンは師匠のお氣に入つたらしいのです。まあやつと三年目に及第したわけです」

讀者の皆さん。みなさんはこの道八の藝談を聞いてなんとお考へになりますか、わたしがわざわざ、しかも突然こんな話を、ここへ持ち出した理由は、自然おわかりになることと思ひます。

業の、話はつい横道へ外れましたが、ここに掲げました一節は、このまへと同様に、煩惱の有問題 無によつて、さらに阿羅漢と佛陀、小乗と大乘との相違を述べたものです。

ところが茲で問題になつてゐるのは、煩惱よりもむしろ業です。いつたい業と煩惱とは、きつても切れぬ間柄にあるので、煩惱といへば業、業といへば煩惱、この二つのものは、不即不離の關係にあるのです。したがつてこのまへに煩惱の問題がありましたから、ここで當然「業の問題」が出て来るわけです。で、まづ業とは、いつたいどんな意味かといふことを申述べておかないと、どうしてもこの一篇の意味がわかりませんから、業の思想を聊か述べておきたいとおもひます。

さて業とは、梵語の羯磨 (Karma) で、これを昔から、行爲、動作などと譯してゐます。しかしそれは、單なる行爲や動作ではなく、どんな動作も行爲も、必ずそれに相當する結果をひき起しますから、業のうちには、結果に對する原因といふ意味ももつてゐます。したがつて、業には「動作」と「原因」といふ二つの意味をもつてゐるわけです。ところで凡てのもの因となる業には、むろん種々ありますが、大別すれば、「思業」と「思已業」の二つになります。思業とは、心で思ひ考へることです。つまり憎いとか、可愛いとか、嬉しいとか、悲しいなどといふ心の所作です。思已業とは、心で思ひ考へたことが言語や、身體の上に現はれたものです。例へば口で喋るとか、手

や足を動かすといふことは、みな思已業です。ゆゑに結局、「思業」と「思已業」とは、身、口(語)意の三業となるわけです。即ち思業は意業であり、思已業は身と口との二業に相當するわけです。尤も業といへば、たいてい身口意の三業と考へられてゐますが、けつきよく私どもの一切の動作、行爲は、この三つ以外にはないわけです。尤も密教などでは、この三業のことを、とくに三密といつてゐます。「三密の修行」といへば、密教ではたいへん重要な修行の方法となつてゐますが、それは手に印を結び、口に眞言を唱へ、意、三摩地に住するといふことで、つまりそれは即身成佛(この身の儘で佛になる)の直路だと教へてゐます。この場合の三密は、三業とおなじであります。が、「衆生本來佛なり」で、本來われらの三業も、佛の三密と等しいのだ、といふ意味で、衆生の三業を三密といつたのです。密とは神祕とか、不可思議などといふ意味です。つまりわれ等の三業には常識で判断のできない、不可思議な神祕な作用があるといふことを示したものです。

業の種 それから業には、性質上また「善業」と「惡業」とがあります。(善にも惡にもあらゆる種相 ざる無記業といふのもある)善業とは、善果を招くべきもの、惡業とは、惡果を感ずべきものです。次にまた業には、さらに共業と不共業とがあります。「共業」とは、自他共通の果を招くべきもの、「不共業」とは、他と共通しない、自分だけの果を招くべきものです。例へばわれわれは人間として、この地球の上に生れたことは、すべての人類に共通する結果です。その共通の果を招く原因が「共業」といふのです。

ところが、おなじ人間として生れても、日本人と生れたものもあれば、また、支那人として生れたものもあれば、獨逸人として、伊太利人として生れたものもあります。またおなじ日本人でも男、女、貧富、美醜などの相違があります。即ち人間はおなじでも、みんなそこに人種、民族、個性などの區別があります。しかもその區別が生ずるのは、結局、不共業によるわけです。不共業によつて、いろいろと區別ができるわけですが、人間といふ總報の果（全體の結果）を招くを「引業」といひ、人種とか性別などの別報の果（部分の結果）を感じるを「滿業」といつてゐます。いつたい世の中には、おなじものは一つもない、といひますが、全く世の中は、文字通り千差萬別、千態萬様です。

しかも佛教からいへば、つまりそれはみんな各自の「業」が違ふからです。業の不同が、千差萬別の結果を招くのであります。私たちは佛教の業——むろん業は佛教独自の觀念ではない。印度哲學に共通する普遍的な觀念ではあるが、佛教はそれを哲學的に宗教的に再組織したのである——の思想を、新しい角度から再認識する必要があるとおもひます。

感果の 業について、あまりにも多くの頁を費しましたが、ちやうどよい機會なので、もう少し遅速 業についてお話しておきたいと存じます。

めぐり来る因果に遅い速いあり

桃栗三年柿は八年

といふ歌がありますが、業が果をひき起す時間には、そこに自ら遅速があります。佛教では、それを四種に分けてゐます。順現業、順生業、順後業、不定業といふのがそれです。現世に造つた業が、現世ですぐに果を生ずるのが順現業です。現世に造つた業が、來世で果を生ずるのが順生業です。現世に造つた業が來々世、また來々世以後に果を生ずるのが順後業です。果を生ずる時期が一定してゐないのが「不定業」です。これにたいして前の三種の業は、時期が一定してゐますから、これを「定業」といつてゐます。ところで、いつたい果を招く業の遅速は、どういふ點から區別されるかといふ疑問が起りませうが、それは

「業道は秤の如し。重きものまづ引く」

で、業の重いものが速く、軽いものは遅くなるわけです。つまり感果の遅速は、業の輕重と正比例するわけです。

なほ業については、いろいろ申述べねばならぬこともあります。だが、大體のことは、ざつと申上げたからこの邊で一應うちきつておきますが、要するに、業は煩惱（惑）とともに、佛教においてはきはめて重要な思想でありまして、これがほんとに理解されないと、どうしても佛教の特徴が、十分呑み込めないわけです。人生が苦であるといふことも、つまりは「惑」と「業」との結合によるのです。「俱舍論」に「世の別は業に由て生ず」といふ如く、私どもの心も身も、また客觀の世界も、すべて業によつて招いた結果なのです。佛教は人事はいふまでもなく、自然現象もすべ

て道徳的に、且つ宗教的に眺めてゆくのです。しかもその見方の根本は「業」であります。従つて私どもが、この世に生れて苦果を招くのも、樂報らくほうを感じるのも、所詮しよせんみな「自業自得じごうじとく」です。私どもは惑業によつて、苦惱にみてる苦果を招き、そしてさらにまた惑業を造り、かくして因果轉々し、生死に輪廻りんねするのです。ゆゑに苦惱の世界を離脱しようとおもへば、どうしてもまづ苦惱を生起する、惑業わくごふの因縁いんねんを断たねばなりません。しかもかうすることによつてのみ、私どもはほんたうの涅槃を得ることができるといふのが、佛教の世界觀であり、人生觀なのです。

大乘の修行

さて愈々これから本文についてお話いたします。女性おんなながらも佛教の眞髓しんすいをよにいそしめ、く體得たいとくしてゐた勝鬘夫人しょうまんふじんは、さらに語をつづけて、業と煩惱についての自分の理解を、釋尊に向つて告白するわけです。

「世尊よ、ちやうど取しゆ(執着、愛着)を縁とし、有漏うろう(漏とは煩惱のこと)の業を因とし、ここに因縁和合して、三有(三界ともいふ、欲、色、無色の三種の迷界)が生ずるやうに、無始の無明たる無明住地を縁とし、無漏(煩惱のないこと)の業を因として、ここに阿羅漢(聲聞)、辟支佛(緣覺)、菩薩との三種の意生身いせうしんを生ずるのです。(意生身とは意のままに自在にその身を受くるといふ意味で、どんな境界にあつても、その爲に拘束こうそくされず、おのれの思ふままに振舞つて、自然に他の人々を感化してゆける身體といふこと)ところが、この三地すなはち三界と、かの意生身(二乗や菩薩)と身生(凡夫のこと)と無漏業の生(煩惱をはなれた菩薩のこと、とくに二乗に區別して)

ふ)とは、みなこの無明住地(わうめいぢうち)の煩惱を縁としてゐるのであります。凡夫も二乗も菩薩も、みなこの根本煩惱をはなれることはできないのであります」

と、かういつて、勝鬘夫人は、さらに二乗と菩薩とは、煩惱をば克服すべき無漏の修業をつんでゐるから、煩惱の生活を營んでゐる凡夫とは、自然そこに非常な距離があるが、しかしまだ無明住地をすつかり離脱したわけではないから、完全なさとりを得た佛には、到底及ばないといふことを説いて、次のやうにいつてをります。

「世尊よ、有愛住地(わうあいぢうち)(無色界における煩惱)と數(色界と欲界とにおける煩惱)と四住地の煩惱(前節に述べたる四種の煩惱で、見惑と思惑のこと)を断じたといふことと、それらの煩惱の根本である無明住地を克服したといふことは別であります。二乗や菩薩が煩惱を断じたといふのは、根本無明を断じたといふ意味ではありません。それは佛によつてのみ始めて断じられるものであります。といふわけは、二乗や菩薩は、無漏の修行こそしてはをりますが、それはいまだ不完全なもので、たうてい佛の如く完全なる無漏の業とはいへないのであります。佛こそまさしく法において自在を得た法王であります。それゆゑにこそ、二乗や菩薩は、さらに佛を龜鑑かひかんとし、一段と佛道の修行にいそしんで、根本無明をすつかり克服し、そしてほんとの涅槃さとりを求むべきであります」

とて、勝鬘夫人は、煩惱をはなれるための大乘の修行の大切なことを説いて、小乗が大乘に及ばないことを示唆してゐるのであります。

世尊。阿羅漢と辟支佛と、最後身の菩薩とは、無明住地のために覆障せらるるが故に、彼々の法に於て、不知不覺なり。知見せざるを以ての故に。應に斷すべき所を斷せず、究竟せず。斷ぜざるを以ての故に。有餘過の解脱と名づく。一切清淨なるには非ず。有餘の功德を成就すと名づく。一切の功德には非ず。有餘の解脱と、有餘の清淨と、有餘の功德とを成就するを以ての故に。有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道を修す。是を少分の涅槃を得と名づく。

少分の涅槃を得たる者は、涅槃界に向ふと名づく。もし一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修すれば、無常壞の世間と、無常病の世間とに於て、常住の涅槃を得、無覆護の世間と、無依の世間とに於て、護となり依となる。何を以ての故に。法に優劣なきが故に、涅槃を得。智慧等しきが故に、涅槃を得。解脱等しきがゆゑに、涅槃を得。清淨等しきが故に、涅槃を得。このゆゑに涅槃は一味なり。等味なり。謂く解脱味なり。

未完成 いつのことでしたか、私はある所で「未成交響樂」といふ題で、こんな話をした交響樂 ことがあります。

「實をいふと、個人にしても、家庭にしても、國家にしても、それはすでに出来上つた完成品ではなくて、みんな未完成品、つまり未成交響樂だといへるとおもひます。一人の指揮者の指揮に従うて、みんなが努力してゆかないかぎり、どうしても立派な調和のある交響樂はできないのです。早い話が、個人にしても、健康といふのは身體の全體の調子がうまく整つてゐることですが、しかし、生れてから死ぬまで、まだ一度も薬のます、醫者にもかかつたことがないといふ人は恐らく少いといつてよからうとおもひます。若い元氣な時分には、醫者がなんだ、薬なんかといつてゐる人でも、だんだん年齢をとるにつれて、いつとはなく醫者にかかり、薬にも親しくなるのがつねです。人間はたいてい四十以上になると、どこかに故障の起るものです。健康だとおもつて、ちよつと油断をしたり、また無理をしたりすると、いつの間にか病魔にとりつかれるのです。交通整理の標語ではないが、まったく「無理と油断は大怪我の基」です。だが、健康とは、ひとり身體だけの問題ではない。肉體の調和といふことではない。心の平和、精神の調和がないと、ほんとの健康とはいへないのです。精神と肉體、身と心の二つが、しつくり行つてこそ、はじめて健康といへるのです。ところが、實はこれがなかなかむづかしいことで、身體が丈夫でも、精神が不健康だつた

り、心がたつしやでも、肝腎の肉體が不健康な場合があつたりして、この二つのものは、容易に調和しにくいものです。始終氣をつけてゐないと、この二つが離れ離れになるのです。だからここに「心身一體の鍛錬」が、ぜひ必要になつて來るわけです。しかも、ちよつと心に身體に油斷ができると、すぐにその調和が破れるのです。健全な精神の指揮に従うて、身體のそれぞれの機關が足並揃へて、歩調を一にしていつてこそ、始めて美しい交響樂が生れるのです。ちやうど、それと同じやうに、社會にしても、國家にしても、それは一箇の有機體であるかぎり、譬へていへば一つの交響樂です。しかも、それは未完成です。例へば國家にしても、國民の各自が、めいめい國法に隨ひ、國憲を重んじ、つまり國家の規定する音符を十分のみ込んで、和協一心の心構へで、上御一人の大御心を體して、しつかり努力してゆかねば、斷じて立派な交響樂は生れないわけです。どこの國でも、國民が少しでも油斷をしたり、また慢り高ぶつたりすると、忽ちにして調和は破れるのです。まつたく油斷は大敵です。けれど、われらが祖國日本は、實に世界無比な立派な交響樂團ではありませんが、しかしそれは國民が、上御一人を中心として、一億一心の覺悟で、懸命に努力するからです。國民の自覺と努力なくしては、斷じて天佑もなければ、神助もないのです。しよせん、「聖戰へ民一億の體當り」です。われらは、少くとも日本人であり、大和民族である以上、われらは「建設へ大和心の勢揃ひ」の肚でもつて、立派な國體曼荼羅、つまり美しい交響樂を創るために、あくまで勇往邁進しなければなりません。しかもかくしてこそ始めて東亞新秩序の建設も、世界新秩序

の建設もできるわけです……」

といふやうなことを話したことであります。

未完成な

たいへん前書が長くなりましたが、愈々これから本文についてお話ししたいと存じます。さて經典の本文は、要するに聲聞と緣覺と菩薩の涅槃は、まだほんとの涅槃

ではない。つまり未完成な涅槃である。佛の涅槃こそが、ほんたうの涅槃だといふことを、煩惱の有無についていつたものです。で、いま平易な言葉でいひ現はしてみるとかういふことです。

「世尊よ。阿羅漢（聲聞）、辟支佛（緣覺）、菩薩（最後身の菩薩とは等覺といつて、もう一步で正覺の位に入る人のこと）の人々は、無明住地といふ煩惱の雲によつて覆はれ障げられてゐますから、彼々の法、つまり一切の事物の實相を掴むことはできません。だから斷すべきものを斷せず、究め盡さねばならぬことを究めつくしてゐません。それゆゑ、解脱といつても、佛のやうな、ほんたうのさとるとはいへないし、また清淨といつても、佛のやうにほんたうの清淨とはいへません。また功德を成就してゐるといつても、佛のやうに、一切の功德を成就してゐるとはいへないのであります」

といふことを、有餘過の解脱とか、有餘の功德などいつたのであります。いふまでもなく有餘とは、無餘にたいする語で、餘殘とか、餘習とかいふことで、煩惱の餘殘、迷のほとぼりが残つてゐるといふことです。この煩惱のほとぼりがさめないうちは、無餘とはいへないのです。まだ心の底

に少しでも煩惱が残つてゐる間は、完全なさと、といふことはできないのです。それを勝鬘夫人は、「有餘の解脱」とか、「有餘の清淨」とか、「有餘の功德」といふやうな言葉で以て、いひ現はしてゐるのです。

要するに本文の最初の一段は、佛陀の完全な涅槃にたいして、聲聞、縁覺の二乘はいふまでもなく、菩薩と稱せらるる人々のさと、とりさへも、まだ完全な涅槃とはいへない。それは畢竟、煩惱の習氣（ほとぼり）が残つてゐるからだ、といふことをいつたものであります。ところで、どういふわけで、さういふ人たちの解脱を有餘といつて無餘といはないかといふに、四諦の法、即ち苦・集・滅・道の四諦の眞理を、いまだ本當に理解してゐないからです。つまり四つの眞理を徹底的に見きはめてゐないからです。別な言葉でいへば、有餘の四諦を知つて、まだ無餘の四諦を知見しないからだといふのです。で、順序として、ここでは一應、四諦といふこと、そして四諦にたいする有餘と無餘との區別を説明しておく必要があるのです。

四つの　さて四つの眞理、すなはち四諦といふことは、釋尊一代の教説の中心をなすもので、眞理

佛陀の最初の説法も四諦であり、最後の説法も四諦であるのです。ただ、四諦をどうみるか。つまり四諦を浅くみるか、深く考へるかによつて、そこに大乘と小乗の區別が生ずるのです。即ち浅く受取るものは小乗、深く理解するものは大乘といふわけです。

ところで四諦の第一は苦諦ですが、苦諦とは苦の眞理といふことで、苦は眞理だといふことです。

いつたい私どもの人生は、どうみても苦です。有名な獨逸の哲學者ショウペンハウエルは「人生は不満と退屈との間を動搖する時計の振り子だ」といつてゐますが、たしかにそれは事實だとおもひます。求めたものが得られない場合は不満を感じ、求めて得られたときには退屈を感じる。所詮、人生は不満と退屈との間を動搖する時計の振り子です。「人は生れ、人は苦しみ、人は死する」それはたしかに眞實です。佛教では四苦、八苦といつてゐますが、いづれにしてもこの人生は苦です。しかしこの苦に目覺めることが、人生を本當に認識したことです。しかもこの苦をほんたうに認識してこそ、そこに始めて解脱への道を求めるやうになるのです。

次に集諦とは、人生の苦惱はどうして起るかといふ、その原因をいつたものです。集とは、昔から招集の義と解釋してゐますが、つまり、苦の起る原因が集諦です。そこで苦の原因は何かといふに、それは要するに、煩惱です。私どもの心の中に煩惱があるから苦しむのです。しかも、煩惱とは、自己を中心とする欲望です。この利己中心の欲望を離脱しないかぎり、人生は永遠に苦であります。しかも人生の苦は煩惱から起る、といふことがわかれば、當然、いかにしてその苦を解脱すべきか。また、どうしたならば煩惱を断すべきか、といふ問題を、眞剣に考へざるを得ないのであります。

第三に滅諦とは、この煩惱を解脱した涅槃の世界をいつたものです。即ち煩惱を滅却した境地が、滅諦すなはち涅槃です。しかもこの「滅」の見方によつて、大小乗の區別ができるわけです。小乗

は滅を文字通りに見て、肉體の亡くなつた境地、再びこの苦惱の充滿する世間に生れて來ないといふことを滅と解します。即ち身も心も都て無に歸した涅槃、それを専門語で身心都滅といつてゐますが、これが佛道修行の理想、目的の如く考へてゐるのが小乗です。ところが大乘では、煩悩のなくなつたことが滅で、肉體の死が滅ではないといふのです。そこに大小乗の區別があるわけです。第四は道諦です。これは滅即ち涅槃への道です。涅槃へいたる方法です。即ち滅を得るための修行の仕方、實踐方法です。いはゆる八正道が涅槃への道です。八正道とは、又これを八聖道とも書きますが、これは八つの宗教的な生活です。

正見（正しい見方）。正思（正しい思索）。正語（正しいことば）。正業（正しい行爲）。正命（正しい生活態度）。正精進（正しい努力）。正念（正しい記憶）。正定（正しい心の統一）。
これがいふところの八正道です。

ところで、小乗の人たちはいふまでもなく、菩薩といはるる人でも、まだほんたうにこの四諦の道理を佛の如く、はつきり知つてをりません。だからお經の本文に、

「有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道を修す。是を少分の涅槃を得と名づく」

といつてゐるのです。この場合、有餘とは不完全のといふことで、少分の涅槃とは、部分的なさと、りといふこと、つまり完全な涅槃ではないといふことです。

完成され では、いつたい完全な涅槃とは、どんな涅槃であるかといふに、それは無住處涅槃た涅槃、といふことです。「無住處涅槃」とは住處なき涅槃といふことで、「生死に住せず、涅槃に住せざる涅槃」といふことです。これがほんたうの涅槃です。生死に住せずとは、生死の迷に囚はれぬといふことで、勝れた智慧をもつてをられる佛は、生死の迷の世間にあつても、その迷に囚はれず、自由に一切世間の人々を救済することができなのです。また大慈悲の心をもつてをられる佛は、決して涅槃の世界に安住してをられないで、つねに世間に現はれて迷へる人々を救ひたまたふのです。だから生死に住せず、涅槃に住せずといふのです。しかも、かうした涅槃こそ、ほんたうの涅槃で、聲聞、緣覺、菩薩といふが如き三乗の人たちは、いまだかうした涅槃を得てゐないから、「少分の涅槃を得と名づく」といはれるのであります。で、お經の本文には、ほんとの涅槃界は佛陀の世界であること、佛道を學ぶものは、一歩づつこの佛の涅槃へ近よつてゆけるのだ、といふことを説いて、次の如くいつてゐるのです。

「少分の涅槃を得た三乗の人たちは、次第にだんだんと、佛の境地へ近づき進んでゆくのであります。もし一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅をさとり、一切の道を修すれば、即ち四諦の眞理をほんたうにさとり切れば、この無常の世間、轉變つねなきこの儂い世で、まことの涅槃を得ることができるのであります。またこの動揺つねなき不安なこの人生に處して、世の人々の護りとなり、頼りとなることができるとあります。しかも、それは要するに、四諦の道理を見きはめ、

あらゆる煩惱の本である無明を断じつくしてゐるからであります。佛の弟子たるものは、この四諦によつて、あらゆる教へに達し、すべての道理を知る智慧と功德とを具へ、どんな人に向つても、自在に法を説き得るやうにならねばなりません。」

といふことをいつてゐるのであります。

差別のま 雨霰雪や氷とへだつれど

まが平等

おつれば同じ谷川の水

といふ古歌があります。雨・霰・雪や氷と、それぞれその相こそ變つてゐますが、その本の姿はいづれも水であります。差別のままが平等、平等のままが差別、即ち差別即平等、平等即差別といふことをうたつたのが、この歌の意味であることは、いまさら申すまでもありませんが、ここに少くとも宇宙の眞理があるのであります。これを佛教では「萬法即眞如」とか、「諸法即眞相」といつてゐるのです。別な言葉でいへば「現象即實在」といふことです。さて以上申し述べたやうに、表面から文字通りにみれば、聲聞といひ、緣覺といひ、菩薩といひ、いづれもわれわれ凡夫とは同一視できない人たちではありますが、それらの人たちが、それぞれに修行によつて得た涅槃は、ほんたうの佛の涅槃とは比較することのできないものだとすると、われらは永遠に佛となることはできない、といふ結論に達するわけであります。つまり永遠に未完成に終るのではないか、といふ疑問が起るわけです。この疑問にたいしてお經の本文には、

「法に優劣なきが故に、涅槃を得。智慧等しきが故に、涅槃を得。解脱等しきがゆゑに、涅槃を得。清淨等しきが故に、涅槃を得」

といつてゐるのです。そのわけは、一切衆生には悉く佛性ありで、いかなるものにも佛性、佛となる可能性があるとといふのが、佛教本來の建前です。従つて率直にいへば、衆生本來佛なりです。従つてここにいふ智慧とか、解脱とか、清淨などといふのは、いづれもこの「佛性」を指していつてゐるのです。凡夫も聖者も、同じく佛性をもつてゐるといふ點においては、少しも變りはないのです。雨といひ、霰といひ、雪といひ、氷といひ、みんな水といふことには變りはないやうに、本質においては、凡夫も佛と同じなのです。すなはち、凡夫は、單なる凡夫ではない。佛としての凡夫であり、聲聞は佛としての聲聞、ないし菩薩は佛としての菩薩であるわけです。したがつて、この道理をよく辨へて、自分にふさはしい修行をすれば、やがて何人も佛の涅槃を得ることができるといふので、お經に、

「このゆゑに涅槃は一味なり、等味なり、謂く解脱味なり」

とて、涅槃の一味平等であることをいつてゐるのであります。

世尊。若し無明住地を断ぜず、究竟せざる者は、一味、等味、いはく明解脱味を得ず。何を以てのゆゑに。無明住地を断ぜず、究竟せざる者は、恒沙等に

過ぎたる、應に斷すべき所の法を斷ぜず。究竟せず。恒沙等に過ぎたる、應に斷すべき所の法を斷ぜざるが故に。恒沙等に過ぎたる法の、應に得べきを得ず。應に證すべきを證せざるなり。

この故に、無明住地積聚して、一切の修道斷の煩惱、上煩惱を生ず。彼心上の煩惱・止上の煩惱・觀上の煩惱・禪上の煩惱・正受上の煩惱・方便上の煩惱・智上の煩惱・果上の煩惱・得上の煩惱・力上の煩惱・無畏上の煩惱を生ず。是くの如く、恒沙等に過ぎたる上煩惱は、如來の菩提智の所斷なり。一切皆無明住地に依りて建立する所にして、一切の上煩惱の起るは、皆無明住地を因とし、無明住地を縁とするなり。

衆惑の

煩惱についての勝鬘夫人の話は、なほも續きます。

根本

「世尊よ、もしも衆惑の根本である無明住地を斷ずることのできぬ人は、ほんたうの究竟者、即ち佛といふことはできません。したがつて、その涅槃は一味、等味、明解脱味とはいへないのです。何故かと申しますに、まだ無明住地を斷ぜず、眞の究竟を得ない者は、まさしく斷じなければならぬ煩惱、それはあの恒河の砂の数よりも多い、夥しい煩惱を斷じないものですから、

當然、まさに悟らねばならぬ證悟が容易に得られないわけです。つまり問題は、すべての煩惱の根である無明住地を斷ずることです。この根がのこつてゐる間は、たうてい完全なさとりを得ることはできません。」
と、かういつて勝鬘夫人は、無明住地の煩惱から、種々雑多なまよひが生じ起ることを説いてゐるのです。

いつたい一切のまよひの根本は、無明住地です。無明住地とは根本無明のこと、それは私どもが先天的にもつてゐる不完全な性質です。この不完全な性質がもとになつて、私どもは苦しまなくともよいことを苦しんだり、惱まなくともよいことを惱んだりしてゐるのです。それがいはゆる凡夫なのです。「夢と思へばなんでもないが、そこが凡夫で……」といふのがそれです。凡ては因縁だとあきらめ、空だとさつてしまへばよいのですが、それが明らかめられず、悟られないところに、人生の苦惱が起るのです。つまり人生の實相にたいする無明（無知）から、苦惱が生れるのです。結局、認識不足が、あらゆる煩惱の根本であるわけです。要するに、この人生にたいする認識不足が、無明住地で、この無明住地がもとで、三毒（貪・瞋・痴）とか、百八とか、八萬四千などといふさまざまな煩惱が生じ起るのです。ところでこの『勝鬘經』には、無明住地から生ずるさまざまな煩惱を十一に攝めて説いてゐます。すなはちお經には

「無明住地積聚して、一切の修道斷の煩惱、上煩惱を生ず」

といつて、十一煩惱を擧げてゐます。

修道斷の煩惱とは、道とは佛道ですから、佛道を修行することによつて、まさしく斷じなければならぬ煩惱といふことです。上煩惱とは煩惱の總名ですが、その上煩惱の主なるものが、ここに擧げてあるのです。

一には「心上の煩惱」です。これは菩提心を發して修行する場合に、必ず起る煩惱のことです。心とは菩提心のこと、菩提を求むる心のことです。つまり、懈怠心がこの心上の煩惱です。

二には「止上の煩惱」です。これは雜念を止息せんとする場合に起る煩惱です。「法性寂然たるを止と名づく」といはれてゐますが、動搖のなくなつた心の状態が「止」です。つまりストップです。不動心、それが止です。

三には「觀上の煩惱」です。これは眞理を觀察する場合に起る煩惱です。「寂にして常に照すを觀といふ」といはれてゐますが、觀とは觀達、觀照、觀察などと熟する語で、つまり「止れ」より生ずる「進め」です。従つて「止」と「觀」とは、表裏の関係です。ストップ・アンド・ゴウ（まづ止れ、みて進め）それが止と觀、定と慧との関係です。

四には「禪上の煩惱」です。これは禪定中に起る煩惱です。散亂粗動とでもいひますか、動搖する心を一にすること、それが禪です。禪とは梵語の禪那で、靜慮のことです。精神統一のことです。

五には「正受上の煩惱」です。これは正受すなはち三昧（禪と同じく靜慮なるも、ここでは、禪を消極的、三昧を積極的に用ふ）に入らんとするとき起る煩惱です。三昧とは梵語で、それを譯して正受といつたのです。「邪亂を離るるは正、法を納るるは受」といはれてゐますが、とにかく心の動搖を制御して、しづかに佛の正法を想ひ、佛の心と一致せんと期することが正受、即ち三昧です。

六には「智上の煩惱」です。これは佛智を體得せんと修行する場合に起る煩惱です。つまり、智慧の目を障へるまよひです。

七には「方便上の煩惱」です。これは方便とは智慧から生れるので、眞實をはなれて方便はありませぬ。ところが「虚偽も方便」などといつて、うそと方便とを混同視してゐるものもありますが、それは大きい誤です。この方便、てだての上起るいろいろな迷が、方便上の煩惱です。

八には「果上の煩惱」です。これは佛道を學んだ結果の上起る煩惱です。修行して得た結果に安住して、一切衆生の救済に精進しないでは、まだほんたうの涅槃といふことはできないのですが、眞にさとりを得ないうちは、往々にしてそのさとりに安住してしまふのです。だが、それはどこまでも迷です。煩惱です。悟後の修行が説かれるのはそのためです。自覺と覺他とが一になつて、始めてそこに眞の「覺」があるのです。

九には「得上の煩惱」です。これは所得のさとりの上に現はれる迷です。だいたいまへの果上

の煩惱と同じ意味ですが、ここでは、折角、體得したさとり、徳をうち壞す迷をいつたのです。十には「力上の煩惱」です。これは一切の衆生を救ふ力を發揮する場合に起る迷です。いつた一切衆生を救ふといふことは、口でいへばなんでもないやうですが、事實それはなかなか困難な仕事です。いかにさとりを得たといつても、實際おのれのさとりを衆生に働きかける段になると、よほどの努力が必要です。さうした場合に起る煩惱が、力上の煩惱です。

十一には「無畏上の煩惱」です。これは何の畏れ憚る所なく、衆生のため法を説く場合に起る煩惱です。獨りよがりになつて、大衆の氣持を無視したり、反對に大衆に迎合したり、人々に阿る、媚びへつらふといふやうなことは、すべてみな無畏上の煩惱です。

右に述べました十一の煩惱は、いづれもみな無明住地、即ち根本無明から生ずるまよひです。

おもたさの雪押へどもはらへども

で、心の奥に無明がある間は、いろいろな煩惱が、つぎからつぎへ起つて來るのです。さとりを得て佛とならぬうちは、どうしても徹底的に煩惱から離脱することはむづかしいのです。それゆゑ、經文に

「是くの如く、恒沙等に過ぎたる上煩惱は、如來の菩提智の所斷なり。一切皆無明住地に依りて建立する所にして、一切の上煩惱の起るは、皆無明住地を因とし、無明住地を縁とするなり」といつてあるのです。

つまり一切の煩惱は、みな無明住地たる根本無明を、因とし縁として起るのであつて、これは如來の菩提智、ほんたうの智慧によらねば、たうてい斷することは不可能だといふことを、いつたのであります。煩惱のことについては、以下經典の本文には、いろいろとまだ詳しく説いてゐます。

世尊。この起煩惱において刹那心、刹那と相應す。世尊、心不相應は無始の無明住地なり。

世尊。もしまた恒沙等に過ぎたる如來菩提智のまさに斷すべき所の法は、一切みなこれ無明住地に持せられて建立せらる。譬へば一切の種子はみな地によりて生じ、建立し、増長す。若し地壞すれば、彼もまた隨つて壞するが如く、是くの如く、恒沙等に過ぎたる如來菩提智のまさに斷すべき所の法は、一切みな無明住地に依りて生じ、建立し、増長す。もし無明住地斷すれば、恒沙等に過ぎたる如來菩提智のまさに斷すべき所の法も、みなまた隨つて斷するなり。是くの如く、一切の煩惱、上煩惱を斷すれば、恒沙等に過ぎたる如來所得の一切の諸法は、通達無礙なり。一切の知見は、一切の過惡をはなれ、一切の功德を得、法王、法主にして自在を得、一切法自在の地に登り、如來・應・等正覺

として師子吼す。わが生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けず。

この故に、世尊。師子吼を以て、了義に依り、一向に記説したまふ。

虎視 牛歩

「世界中みな非常時の國ばかり」まつたく川柳子のいふやうに、世界中みな非常時の國ばかりです。世界のどこを眺めても、非常時でない國は一つもありません。西をみても東をみても、自分の國だけは無事泰平だ、といふ國は一つもないといつていいと思ひます。「人間は人間にとつて狼である」といつた哲學者もあるかと思へば、また「萬人、萬人を敵とす」と鋭い皮肉をとばした社會學者もあります。要するに人間を、弱肉強食の動物並に取扱つてゐる世界の國々の間に、絶えず血腥い争闘がくり返へされてゐることは、敢て不思議ではないのです。賠償金もとらぬ領土的野心もないといふ、支那事變のやうな戦争は、世界廣しと雖も、どこにもそんな國はないのです。日滿支の緊密な提携によつて、露々たる親和の東亞を建設しようなんていふことは、おそらくどの國の人にもわからぬ不可解なことだと思はれます。いや、八紘一宇を理想とする日本以外には、斷じてそんな意味での戦争をする國はないのです。だから聖戰の意味を本當に理解しない重慶政府は、今にいたるまで無謀な抵抗をつづけてゐるわけです、また支那に經濟的利權を

多分にもつてゐる英米兩國では、無暗に蔣政權を煽動して、抗日の戦争を續けさせてゐるわけです。で、さうした點からみても支那事變は、名前こそ、支那に起つた事變であつても、實に複雑怪奇な事變であります。従つてこの事變に處するわれわれも、これまでの日本人のやうに、速戰即決主義ではないけないのです。長期抗戰とか、長期建設などといふその言葉通りに、あくまで腰をおろしてゆつくりと急がずに、手つとり早く片付けようといふ如き、性急な態度は、この際すつぱり清算しなくてはなりません。虎視牛歩——虎の如く視て、牛の如く歩む——さうした心構へが、今日のわれわれにとつて、最も大切なことだと存じます。しかしさうした確乎たる心構へは、一朝一夕でできるものではありません。それこそ平素の訓練、鍛錬が必要です。

「自ら萬卷の書を読むにあらざれば、いづくんぞ千秋の人たるを得んや。自ら一己の勞を輕んずるにあらざれば、いづくんぞ兆民の安きを致すを得んや」

と古人もいつてゐます。私どもは幾多の古聖の訓へた金言を、拳々服膺することによつて、不動心の鍛錬にいそしまねばならぬと思ひます。

迷ひの根 を斷つ

「眞理は古くして且つ新らしい」といはれてゐますが、『勝鬘經』に説かれてゐる聖語には、私どもの心して味ふべきものが多々あります。經典の文句をそのまま文字通りにみると、いかにも古めかしい時代おくれのやうに解せられますが、ふかくその内面的意味を味はつてゆきますと、實に今日においても、立派な指導原理になるのです。ところでこのたび茲に

掲げました文句は、心の動揺つねなき凡夫の生活はどうして起るか。われらは何人も速かに不動心を體得して、何物によつても囚はれない、自由無碍な佛陀の境界に到達せねばならぬ、といふことを説いてゐるのであります。さて本文の

「この起煩惱おぼんごにおいて刹那心、刹那と相應す。心不相應は無始の無明住地なり」

といふことは、外界の刺戟に應じて起る、欲しいとか、惜しいとか、憎いとか、可愛いなどといったやうな煩惱まよひが起煩惱で、この心の迷は、いつも刹那毎に變化し動揺するもので、新なる刺戟しげきが外から入つて來るごとに、それに相應して心はつねに動くのです。だが、起煩惱の根本となつてゐる無明住地、すなはち根本無明は、外界の刺戟によつて、始めて起つたものではありません。先天的に人間が生れつき具そなへもつてゐるものです。つまり刹那ごとに變化するものではなくて、刹那と相應せざる煩惱です。しかもその煩惱は、佛の境界に達しないうちは離脱することができないのであつて、菩提ぼだいの智慧を得た如來にょらいにして、始めて根本無明を除くことができるのです。しかも凡ての煩惱の所依たるべき根本無明を除けば、他の一切の迷も自然に無くなつてしまふのです。

「もしまた恒沙等に過ぎたる如來菩提智のまさに斷すべき所の法は、一切みなこれ無明住地に持せられて建立せらる」

とて、根本無明と、それを所依よりどころとしておこる起煩惱との關係を、草木の種子と、大地との關係に譬へて、經には

「譬へば一切の種子はみな地によりて生じ、建立し、增長す。もし地壞すれば、彼もまた隨つて壞するが如く、……」

と、いつてあるのです。つまり、何事も根本が肝腎かんじんで、迷の根本となるべき無明住地を除かなければ、いくら煩惱をとり除かうと努力しても、所詮、無駄な骨折になつてしまふわけです。しかも、一旦あらゆる煩惱の基礎たるべき、この根本煩惱をとり除きさへすれば、おのづと他のすべての迷は、春の雪のごとく消え去るのですが、それはただ完全な悟を得た佛にして、始めて可能だといふのです。

悟りの 風光 さて一たび煩惱の根を斷つたさ、とりの境地きょうちとは、いつたいどんなものかといふに、經の本文には、

「如來所得の一切の諸法は、通達無礙つうだつむがいなり。一切の知見は、一切の過惡をはなれ、一切の功徳を得、法王、法主ほつしゅにして自在を得、一切法自在の地に登り、如來・應・正等覺として師子吼す」

といつてあります。即ち煩惱がまったく無くなれば、心は宛ら澄みきつた鏡のやうになるから、凡てのものがあるのままに映る。すればいかなるものも、誤りなく認識することができるから、外界の何物にも囚はれず、一切の事物の真相を徹見しうると同時に、また一切の衆生を、自由自在に教化することができるわけです。

それゆゑ、經に「法王、法主にして自在を得」といつてあるのですが、法王とか法主といふのは、

つまり佛陀のことで、佛は自在に眞理の法を説き、自由に一切の人々を救ふ力をもつてゐるから、かういつたのです。それから通達無礙といふ佛の徳について思ひ起すことは、

原中やものにもつかず鳴く雲雀

といふ句です。芭蕉は「無心所着」と題してこの句をよんでゐますが、たしかに心に所着なき境地、通達無礙の境界を、巧みにいひ現はしてゐることばだと思ひます。尤も西行法師にもこれに似た歌があります。

雲雀たつ野中に生ふる姫百合の

何につくともなき心かな

雲雀は空高く鳴いてゐる。百合の花はつつましく野原に咲いてゐる。いかにものどかな晩春の景色です。その長閑な風景をよんだのが、この西行の歌でありませうが、芭蕉もおそらくこの和歌にヒントを得て、無心所着の心をよんだものとおもはれます。いづれにしても、心に所着なければ、通達無礙です。通達無礙にして始めて、法王たり、法主たりうるのです。あの『般若心經』に

「心に罣礙なし。罣礙なきが故に、恐怖あることなし。一切の顛倒、夢想を遠く離れて、究竟涅槃す」

といふ有名な文句がありますが、けつきよく涅槃つまり「さとりの世界は、煩惱のなくなつた光風霽月の境地です。顛倒夢想をはなれた罣礙のない世界です。しかもこの煩惱のなくなつた人が、

如來といはれ、應供といはれ、等正覺といはれる佛陀であります。「勝鬘經」では、この佛陀のさとりの世界を、

「わが生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けず」といつてをりますが、これはこの前にもすでに出てゐる言葉で、つまり煩惱を除き去つて、清淨な

さとりの生活は成就された。なすべきことは已に成し終つた。いまや何物にも囚はれず、自由に衆生救済の聖業にいそむことができる、といつたさとりの世界をうたつた言葉です。

最後に「了義により、一向に記説す」といふのは、何らの方便をからずに、おのれのさとりに得た眞理の法を、そのまま衆生に説き示す、といふ意味です。了義とは不了義にたいする言葉で、完全なる意味、ありのままの意味といふことで、つまり第一義諦の眞理のことです。

世尊。不受後有智に二種あり。謂はく、如來は無上の調御を以て、四魔を降伏し、一切世間を出でて、一切衆生の瞻仰する所となりたまふ。不思議の法身を得て、一切爾焰地に於て、無礙法自在たり。上に於て更に所作なく、所得なき地を得、十力勇猛にして、第一無上無畏の地に昇り、一切爾炎と無礙者とをもて、觀じて他に由らず、不受後有智をもて、師子吼したまふ。

世尊。阿羅漢・辟支佛は、生死の畏を度りて、次第に解脱の樂を得るとき、是の念を作す。

「我れ生死の恐怖を離れ、生死の苦を受けず」

と。世尊。阿羅漢・辟支佛の觀察する時、不受後有智を得て、第一蘇息處の涅槃地を觀ず、世尊。彼れ先きの所得の地にして、法に愚ならず、他に由らずして、亦自ら有餘の地を得て、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを知る。何を以ての故に。聲聞・緣覺乘は皆大乘に入るとならば、大乘とは即ち是れ佛乘なり。是の故に三乘は即ち是れ一乘なり。一乘を得る者は、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提とは、即ち是れ涅槃界なり。涅槃界とは即ち是れ如來の法身なり。究竟の法身を得とは、即ち究竟の一乘なり。異の如來なく、異の法身なし。如來は即ち法身なり。究竟の法身を得とは、即ち究竟の一乘なり。究竟とは即ち是れ無邊不斷なり。

無上の 調御師 もかしから「如來の十號」といつて、佛陀には十種の名稱があります。世尊といふのもその一つですが、「調御師」とか、「調御丈夫」といふのもその一つです。ところでい

つたい「調御」といふのはどんな意味かといふに、他の語でいへば、訓練とか訓練とかいふことです。どんなに生れつきよい馬でも、訓練せず訓練しなかつたら、決して名馬にはなりません。御者が日頃よく訓練すればこそ、はじめて名馬になるのです。それはひとり馬にのみ限つたわけではない、人間でもよく教育し訓練し、鍛錬しなければ、断じて立派な人を作ることにはできません。教育の目的は人を作ることだ、人を人にすることが教育の理想だ、といはれてゐますが、要するに、馬でも牛でも、犬でも猫でも、それを教育する、つまり訓練することが第一です。ところが何故に、佛陀のことを調御師とか、調御丈夫などといふかといふに、それは一切の煩惱を克服されてゐるからです。われわれ凡人は煩惱のために、あべこべにリードされるのですが、佛陀は煩惱をよく調御して、そのまま菩提の資糧として攝取されるのです。

古い格言に「君子は心を以て耳目を導き、小人は耳目を以て心を導く」といふのがありますが、たしかに考へさせられることばです。

われわれは少くとも心を以て耳目を指導する、君子を以て理想としなければなりません。つまり煩惱に左右される凡夫の生活をはなれて、煩惱を克服して、自由に煩惱を使ふ、佛陀の生活を目的として、進まねばうそだとおもひます。

四殺といふ 幕末の有名な三舟（海舟、泥舟、鐵舟）の一人、海舟の書いた軸を、かつて私はある處で見ました。

常人^ハ以^テ嗜欲^ニ殺^レ身^ヲ。 以^テ財寶^ニ殺^レ子孫^ヲ。
以^テ政事^ニ殺^レ民^ヲ。 以^テ學術^ニ殺^レ天下^ヲ。

ほんたうに味ふべき名言だとおもひます。いつの世いつの時代においても、人間はおのれの嗜欲でもつて、おのれの身を殺してゐるのです。財寶は以て子孫を養ふべきですが、却つて氣の毒にも子孫を殺す場合があるのです。人民を生かすべき政治が、政治をとる人によつて、却つて人民を殺すことになることがあるのです。天下、國家を指導する學術が、却つて天下、國家を毒することが往々あるのです。つまりは「人」です。煩惱の持ち主たる常人は、生かすべき道具を、却つて殺す道具にしてしまふのです。煩惱なき人は、常人が殺して用ゐてゐるものを、立派に生かして使ふのです。要は心の問題です。人の問題です。われわれは海舟の「四殺」を契機に、おのれの見方、考へ方を、もう一度見直す必要が多分にあると存じます。

四種 ● 四殺に關聯して當然考へられるのは、經文にある「四魔」といふことです。四魔とは、
の魔 前述の如く天魔、煩惱魔、陰魔、死魔の四種の魔です。ところで魔とは、梵語で、「殺すもの」「死なすもの」といふ意味です。昔の支那人は障礙、能奪命、華箭などと譯してゐます。華箭とは今日の言葉でいへば媚態で誘惑することですが、華箭とは面白い譯語です。まづ天魔即ち第六天（他化自在天）の魔王は、よく人の善事を害する惡魔で、佛道を修行する者を脅迫したり誘惑したりする惡魔です。次に煩惱魔とは心魔です。煩惱は佛道修行の障りとなるものですから、これ

を惡魔として取扱ふのです。次に陰魔とは身魔です。陰とは五陰（五蘊）のことで、われらの身體を構成してゐる色受想行識の五元素のことですが、まへの煩惱魔を心の魔とすれば、これは身の魔に當るのです。肉體はいろいろな苦惱を生ずるものになりますから、自然、肉體が惡魔になるわけです。次に死魔とは、死はよく人間の生命を絶つものだから、佛道を修するものにとつては、死はそのまゝ惡魔となるわけです。

要するにわれわれ人間の一生は、かうした惡魔との不斷の争闘です。この聖戰に敗るれば、われわれはいつまでも惡魔の囚徒、魔の眷屬です。しかし、一旦さうした惡魔を調伏すれば、天魔は却つてわれらの膝下に跪き、死魔もつひにその影をひそめ、煩惱の魔も一轉して菩提となり、五陰の魔も、忽ちにして眞理を求める所の法器と化するわけです。問題は惡魔との戦ひに勝つか負けるか、征服するか征服せらるるかです。潔く惡魔を調御して、勝利の凱歌を擧げ得たるものこそ、まさしくそれは佛陀です。「一切世間を出でて、一切衆生の瞻仰する所となりた」る佛陀であります。それは、「不思議の法身を得て、一切爾焰地（智母、智境ともいふ、悟の境界のこと）に於て、無礙法自在たり」うる佛陀です。その佛陀こそ、十種の勝れたる智慧の力を以て、一切衆生のために、身を挺して眞理の法を師子吼したまふのであります。

唯有一 有名な『法華經』の方便品のうちに、
乘法 「十方佛土中、唯有一乘、無二亦無三。——十方佛土の中には、唯だ一乘のみあり、

「二もなく亦三もなし」

といふ文句があります。これは「一乗は眞實、三乗は方便」といふことを、明示した有名な言葉であります。一乗は大乗、三乗は小乗、小乗は大乗への道程であり、大乘こそ佛道修行の眞實究竟の教であることをいつたものです。ところでこの一段の始めに、

「不受後有智に二種あり」

とありますが、これは不受後有智、すなはち一切世間の、いかなる變化にも、刺戟にも、動搖しないさとの智慧といつても、そこには、おのづから二種の區別があることをいつたものです。二種の區別とは、大乘と小乗です。佛陀の智慧と、聲聞・緣覺の智慧です。一方は完全な智慧ですが、一方は不完全な智慧です。完全なさとりとは、おのれの悟り得た智慧で以て、進んで積極的に、一切衆生を濟度し、救護するのです。つまり衆生濟度といふ慈悲となつて現はれた智慧こそ、ほんたうの智慧であり、眞實のさとりなのです。ところが不完全なさとりは、智慧がはまだ慈悲となつて現はれないのです。

いはゆる經文の

「我れ生死の恐怖をはなれ、生死の苦を受けず」

と悟つただけで、一切衆生のために師子吼するとか、一切衆生を濟度するといふやうな、積極的な行動には少しも出ないのです。それが小乗のさとりなのです。つまり、小乗のさとりは、いはば個

人的なさとりです。部分的な自覺に過ぎないので。大乘のやうな全體的なさとり、普遍的な自覺に到達してゐないから、それは不完全なさとりだといふのです。

しかし考へてみれば、個人的さとりを飛び越えて、一足飛びに全體的さとりへ到達することはできません。個人的自覺こそ、全體的自覺へ到る唯一の道です。たとひそれが不完全なさとりであっても、そのさとりがなくては、たうてい完全なさとりへ達することは不可能です。ゆゑに、

「三乗は即ちこれ一乗なり。一乗を得る者は、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提とは、即ち是れ涅槃界なり。涅槃界とは即ち是れ如來の法身なり」

と經典にされるされてゐるのであります。阿耨多羅三藐三菩提とは、アマッタラサミヤクサンボウデイといふ梵語で、これは佛教ではたびたび出て来る言葉であります。阿耨多羅三藐三とは、菩提を形容した言葉で、「菩提」は覺とか、智などと譯しますから、「無上正徧知」または「無上正等正覺」などと翻譯せらるべき言葉です。詳しくいへば、阿耨多羅とは「この上もなき」といふ意味、三藐とは「正しい」といふ意味、三菩提とは一切の智慧が集つてゐるといふ意味です。だが、昔の支那の翻譯者は、譯さず梵語のままに用ゐてゐますが、要するに大乘のほんたうのさとりをいつたものです。

法身と

それから本文の最後のところに、

如來

「異の如來なく、異の法身なし。如來は即ち法身なり。究竟の法身を得とは、即ち究

竟の一乘なり。究竟とは即ち是れ無邊不斷なり」

とありますが、これについて一寸註釋を施しておきます。いふまでもなくこれは、法身の外に如來があるのではなく、如來の外に法身があるのではない。如來といひ、法身といふも、要するに一つのことをかりに分つていつたものに過ぎない、といふことをいつたのです。これについて聖德太子は『勝鬘經義疏』に、

「法身はこれ法、如來はこれ行なりといへば、その義は別なるに似たり。ゆゑに更に相を擧げて即を明すなり。果を再び擧ぐるに隨つて、因もまた再び明すなり。法身はこれ萬德の正體なり。

一乘を法身の正因となしたるゆゑに、偏に法身を擧げて、以て因の究竟を明すなり」

と説明されてありますが、要するに法身は、如來の本體たる不生不滅の眞理で、それが究竟の一乗です。その究竟の一乗、即ち眞理の人格的活動が如來です。次に究竟を説明して「究竟とは無邊不斷なり」と、經の本文に説明してありますが、無邊とは無限の空間、不斷とは無限の時間、つまりいづれも有限、相對を超えた無限絶對の境地を表現したとばであります。けだし眞理は無縁絶對の永遠なる存在でありますから、それを經典には「無邊不斷」といふ術語で、いひ現はしたのであります。

世尊。如來は限齋の時あることなくして住したまふ。如來・應・等正覺は、

後際にひとしく住したまふ。如來は限齋なければ、大悲もまた限齋なくして世間を安慰す。無限の大悲、無限に世間を安慰す。この説をなすもの、是をよく如來を説くと名づく。

もしまた説いて、無盡の法なり。常住の法なり。一切世間の所歸依なりといはば、またよく如來を説くと名づく。この故に未度の世間、無依の世間に於て、後際にひとしく無盡の歸依をなさむ。

常住の歸依とは、いはく如來の應・等正覺なり。法とは即ちこれ一乗の道を説くなり。僧とはこれ三乘衆なり。この二の歸依は究竟の歸依にあらず。少分の歸依と名づく。何を以てのゆゑに。一乗道の法は、究竟の法身を得と説いて、上に於てさらに一乗の法と説くことなければなり。

三乗の衆は恐怖ありて如來に歸依して、出でむことを求め、修學して阿耨多羅三藐三菩提に向ふ。この故に二依は究竟に非ず。これ有限の依なり。

もし衆生ありて、如來に調伏せられ、如來に歸依し、法の津澤を得て、信樂の心を生じ、法、僧に歸依する。この二の歸依は、この二の歸依にあらずして、

これ如來に歸依するなり。第一義に歸依するは、これ如來に歸依するなり。この二の歸依と第一義とは、これ究竟くきやうして如來に歸依するなり。

何を以ての故に。異いの如來なく、異いの二なければなり。如來に歸依するは三の歸依なり。何を以ての故に。一乗の道を説きたまへばなり。如來の四無畏成むむじやう就じゆしたまへる師子吼の説なり。

もし如來、かの所欲ほつべんに隨ひ、方便を以て説きたまへることは、即ちこれ大乘なり。二乗あることなし。二乗は一乗に入るを以てなり。一乗とは即ち第一義だいいちぎ乘じやうなり。

無限への
の恐れ

西行法師の詠んだといはれる歌にこんなのがあつたと思ひます。

おのづから月すむ空に憬るる

心の奥ぞ知るよしもがな

天空遙かかなたに澄む月、その月の光を眺めて、一種の敬虔な憬おそれにも似た感じをもたぬものは、恐らく一人もないと思ひます。月さえ渡る大空の景色には、どんな人でも、それにたいして神祕的な憬れをもたぬものはないでせう。

「この世の中で、自分の最も畏敬おそするものは、大空に輝く星と、わが心のうちに光る道德律だ」と、カントはいつたといふことですが、哲人てつじんならずとも、およそ天上遙に輝く、月や星の世界にたいては、誰でも一種の淡い思慕しぼのころを抱かぬものはないとおもひます。けだし、さうした人間の氣持は、けつきよく無限を憬れ、永遠なるものを戀ひ慕ふ、人間共通の心理だといつていいと思ひます。それは文明人だらうと、野蠻人だらうと、いやしくも人間であるかぎり、何人ももつてゐる偽いつはりりない感情でせう。

しかも、その無限なるものへの憬れ、永遠なるものへの思慕、それこそまさしく宗教心といはれ、宗教的意識しゆじゆてきいしぎといはれるものだと思ひます。

ところで經典の本文の、

「如來は限齋げんさいの時あることなくして住したまふ」

といふことですが、これはつまり如來は無限、絶對の存在だといふことをいつたもので、「限齋の時あることなし」とは、無限の存在といふことです。しかしその無限であり絶對である佛は、まさしく應供おんぐであり、等正覺であります。應供とは、このまへにもたびたび出て参りましたが、世間の供養を受くる資格があるといふこと、正等覺とは、佛の智慧は正しくして遍あまねく一切のことを了知したまふことをいつたものです。「後際に等しく住したまふ」といふことは、未來においても過去、現在とひとしく永遠に存在したまふといふことをいつたものです。従つて、その時間的にも、空間

的にも、無限であり、絶対である所の如來の慈悲も、また無限、絶対であつて、つねに一切衆生の苦を抜き、樂を興へたまふのであります。かくの如く佛は無限、絶対の存在であり、その佛の具へたまふ慈悲も、また絶対、無限であるのだといふことを、はつきり理解したるものが、ほんたうに如來を知つた人であり、かかる人にして始めて佛の境界をよく説きうるのである、といふのが、本文の最初に説かれてゐる一段の意味であります。

眞實の 　いつたいわれわれ人間は、どうみても不完全な存在です。不完全なるものは、いふまゝ歸依　でもなく有限なものであり、相對的な存在です。ところで私共が、一旦有限なもの、相對的なもの、不完全なものだといふことを自覺しますならば、勢ひ何人も無限なもの、絶対的なもの、完全なものに憬れて、それに歸依せざるを得なくなるのです。

つまり如來にたいして、いまだ歸依のこころを發し得ぬ人は、自分が不完全なものであり、有限なものであることを、はつきり自覺してゐない人だといつていいのです。ところで、その如來の説きたまふ法はどうかといふに、如來が無限であり、絶対であるやうに、その法も亦無盡であり、常住であるのです。しかも常住の法であり、無盡の法であるがゆゑに、はじめてわれわれは、その法に歸依することができるのです。

いつたい私共の住んでゐる世界は、この經典の本文にも、しばしばくり返して説かれてゐるやうに、全く「未度の世間」であり、「無依の世間」です。未度とは、未だ濟度されないといふ意味で

あり、無依とは、依り處のないとか、頼りないといふ意味です。有名な「法華經」には、

「三界は安きことなし、猶し火宅の如し。衆苦充滿す。甚だ怖畏すべし」

といはれてゐますが、たしかにそれは偽りのない眞實の言葉です。現に今日の世界の情勢を眺めても、それははつきり背れることです。時の古今、洋の東西を問はず、個人にしても社會にしても、一日として安らかな時といふものはありません。全く「敗壞不安の相」です。その敗壞不安の世相を、本當に理解しないがために、そこにさまざまな迷妄の生活が始まるのです。例へば佛蘭西がさうです。マヂノ線と英國の背景を頼りにして、大丈夫負けなないと安心しきつてゐた結果、たうとうあのやうな苦杯をなめたではありませんか。他國に頼り、安逸に馴れて、惨めな敗け方をしたフランスをみるにつけ、私どもは他山の石として、學ぶべき點が多々あると思ひます。頼るべからざるものに頼り、自ら安逸を貪つて、必死に自分を磨くことを忘れたものは、いつの世、いづれの時代においても、必ず亡ぶものです。

篤敬　　ところでいつたいわれわれの世界において、ほんたうに頼りになるもの、つまり眞に歸

三寶　　依するに足るものは何であるか。といふに、佛敎では、佛・法・僧の三寶だといふのです。

三寶の一々については今さら詳しく述べる必要はないでせうが、聖德太子は十七條憲法の第二條に、「篤く三寶を敬ふべし。三寶とは佛・法・僧なり。即ち四生の終歸、萬國の極樂なり。何の世何れの人かこの法を貴ばざる」

と仰せられてゐるやうに、眞にわれわれの歸依すべきものは三寶です。歸依三寶によつて「敗壞不安」の世界も、そのまま常住安樂の世界になり、厭ふべき娑婆（忍土）も、樂しむべき淨土となるのです。歸依なきものには不安があり、歸依あるものには安心があるのです。但し同じく歸依三寶といつても、そこに自ら區別があります。それは「究竟の歸依」と「少分の歸依」です。

ゆゑに經の本文に、

「常住の歸依とは、いはく如來の應・等正覺なり。法とは即ちこれ一乘の道を説くなり。僧とはこれ三乘衆なり。この二の歸依は究竟の歸依に非ず。少分の歸依と名づく」

といつてあるのです。すなはち究竟の歸依とは、絶對の歸依であり、少分の歸依とは、相對の歸依といふ意味で、所詮は、太子の仰せられた如く「世間虛假、唯佛是真」です。唯だ佛のみ眞に歸依すべきものでありまして、ほんたうに佛に歸依するものにして、始めて法にも、また僧にも歸するといふことになりうるのであります。といふわけは、いつたい法にしても、僧にしても、佛をはなれてはあり得ないのです。もし佛がなければ、法を説く者もないわけですし、法が説かれてゐなければ、これを學び、これを傳へる僧もないわけです。つまり、佛あつての法であり、僧であるのです。即ち一乘の法にしても、三乘の衆（聲聞・緣覺・菩薩）にしても、それは佛の説かれた法であり、佛の道を親しく履み行ふ人々です。従つて、その根本となり、所依となるものは、結局、佛であるわけです。つまり佛は「無限の依」であり、法と僧とは「有限の依」であるわけです。しかし、

法がなく、僧がなければ、われわれは佛を知ることができません故、法も僧も、佛と同じく、われわれの歸依の對象となるべきものです。「篤く三寶を敬へ」とか、「三寶に歸依せよ」といはれるのも、要するにかうした意味においてであるのです。

三寶の現

いつたい三寶のうちで、一番誤解され易いのは僧といふ言葉です。世間で僧といふ代的把握と、すぐ袈裟や衣をつけた坊さんのことだと考へてゐますが、しかしそれはもとより

認識不足です。元來、僧とはしくは僧伽（Sangha）で、和合といふ意味です。「大乘義章」にはかういつてゐます。

「僧とは外國の正音に名づけて僧伽といふ。この方に翻譯して和合と名づく。衆の行徳乖はず。之を名づけて和と爲すなり」

つまり僧とは和合、又は和合衆といふことで、和合せぬものは僧ではありません。しかし和合するには、勢ひお互の私心を去らねばなりません。名利を求めたり、權勢を争ふやうでは、斷じて和合はできません。聖德太子が、十七條憲法の劈頭に於て「和を以て貴しとなす」と仰せられ、その和を實現するには、篤く三寶を敬ふこと、天皇中心であるべきこと、政治は公正でなければならぬこと、かういふ三つの點を、極力高調遊ばされてゐることは、たしかに千古の名言であるといはねばなりません。昭和十六年春以來、政治の新體制を叫ばれ、政黨の解消が行はれたことは、まことに當然とはいひながら、頗る意味ふかきことで、それはまさしく聖德太子の御精神を、現代的に再

組織することだと思ふのであります。なんといつても、これまでの政黨は、その目的が、主として政權の爭奪にありました。そしてまたその立憲の趣旨は、自由主義か民主主義か、もしくは社會主義でありました。従つてその根本の世界觀、人生觀は、稍々もするとわが國體と相容れぬものがあつたのです。したがつて今日の時局下、當然解消すべき運命にあつたわけで、このたびの東亞新秩序の建設に際して、まづ政治の新體制が叫ばれ、一君萬民の旗印の下に大政黨體の體制が樹立されるやうになつたことは、まことに國家のため慶賀に堪へないことであります。

ところで、その新政治體制の目標、即ち國內體制の一新には、むろんいろいろありませう。例へばその具體的方途として政黨政治の修正を始め、教育、文化、經濟、外交等々、一大更新を加へねばならぬことは數々ありませう。しかし、結局、その根本となるものは、一億一心の「大和」だと思ひます。語をかへていへば、國民の一人一人が、本當に日本人だといふ信念に目覺めることです。日本人の信念とは何か。それはいふまでもなく、「大和」を國の名前とする日本は、神の國であり、佛の國だといふことを再確認することでありませう。この信念がなければ、政治も、教育も、經濟も、外交も斷じて刷新はできません。つまり問題は、大和協力をスローガンとする僧伽オウガの建設です。畏くも、天皇を佛寶と仰ぎ、國法を法寶と觀じ、國民を僧寶と信ずることが、三寶に對する佛教徒の現代的認識であると存じます。従つて國法に歸依し、國民に歸依することも、その根本は、天皇に歸依し奉ることにおいて、始めてほんたうの生命があり、價值が生ずるといはねばなりません。

戰時生活

この頃、政治の新體制と共に、わが國の合言葉になつてゐることは、戰時生活の建設

といふことです。戰時生活とは何であるか。といふことについては、今日いろいろ議論もありますが、要するに、今日の國民の生活ぶりは、どうみてもまだ緊張してゐるとはみえません。大戰爭をしてゐる國民とは思はれないほど緩んでゐます。これを徹底的に更始一新しようといふことは、あまりにも當然なことです。

ところで何故に國民は緊張しないのか。なぜ國民の生活は緩んでゐるのか。それは結局、時局にたいする認識が缺けてゐるからです。勿論、それは日本國民の全體がさうだといふのではありませぬ。「愛國心はローマを去るほど強し」といふ諺があるやうに、大都市とりわけ東京を去るほど、愛國心は強いやうです。地方の田舎へゆけば、贅澤ぜいたくはおろか皆緊張して、銃後の生活にいそしんでゐますが、都會地へゆくに従つて、肝腎の緊張味に缺けてゐるやうです。戰地から歸還した兵隊さんが、銀座を歩き、百貨店へ入つて、東京人の呑氣のんきな生活ぶりを見て「東京は日本人の町か」といつて、駭き且つ憤慨したといふことですが、内地にゐるわれわれから見ても憤慨する位ですから、兵隊さんの腹を立てるのも無理はないと思ひます。どうみても日本人の大多數は、危急存亡のこの超非常時局に目覺めず、いまだあまりにも個人主義です。自由主義です。この個人主義、自由主義を清算しきれないでは、どうしても生活の更始一新を計ることはできません。それにはもとより國民各自の自肅じしやく自戒じけいによらねばなりません。やはり法の制裁や、國家の強力な統制を待つより仕方

がないのです。尤もそれは國民として、甚だ不甲斐ないことではありますが、大戦争下の國民生活をみるにつけても、私どもは今さらながらその必要を痛感するのです。改めていふまでもなく國民のための國家ではなく、國家のための國民であるのです。國家は一本の木、國民はその木の枝や葉や根であるのです。枝や葉や根のために、木があるのではない。木のために枝や葉や根があるのだといふ、この全體主義的な考へ方を、本當に心から國民に覺らしめるには、どうしても法の制裁が必要であり、國家の強力な統制が入用になつてくるのです。

話はいづれ横道へ外れましたが、經文の、

「もし衆生ありて、如來に調伏せられ、如來に歸依し、法の津澤を得て、信樂の心を生じ、法、僧に歸依する」

とあるのも、つまりは同じことだと思ひます。いつたい、われわれ凡夫は、如來に調伏されなければ、いつまでも自分で自ら覺るといふことはしないものです。如來に調伏せられて、始めて目醒めるのであります。丁度それは父親に叱られて子供は勉強するのと同じです。親爺が怖いので勉強するのでありますが、やがてはその叱り手のおかげ、有難さがわかるやうになるのです。そのやうに、凡夫は佛に調伏せられて、漸く自覺し、佛に歸依するやうになり、さらに佛の説きたまへる法の津澤、すなはち潤ひによつて、信仰心を生じ、佛とおなじく法や僧にも歸依することになるのです。しかも如來は、衆生の機根即ち性質に従つて、いろいろと方便の教を説かれてゐますから、同じ佛法と

いひながら、そこには高下淺深の區別も生じて來るわけですが、いづれも大乘即ち一乗の道に入れしめんがためであるといふので、經には、

「如來、かの所欲に隨ひ、方便を以て説き給へることは、即ちこれ大乘なり。二乗あることなし。二乗は一乗に入るを以てなり。一乗とは則ち第一義乘なり」とあるのです。

以上で随分に長かつた「一乗章」も愈々終をつけました。之を要するに、この一乗章は、このまへの「攝受正法章」と、一體表裏の關係をなすもので、まさしく『勝鬘經』の眼目であります。すなはち正法を攝受するといふことは、つまり大乘即ち一乗の法を信じ、且つそれを實行するといふことでもありますから、この一乗章は、この經典のうちでも一番ながい一章であるわけであります。

勝鬘經講義

卷上

日本出版會承認い170103號



昭和十九年八月十五日印
昭和十九年八月二十日第一刷發行（五千部）

定價 二圓
特別行爲稅 十六錢
合計 二圓十六錢

著者 高神覺昇

發行者 中村梧一郎

印刷者 萩原印刷所
代表者 内田作之輔

發行所 株式會社 八雲書店

配給元 東京都神田區 淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

東京都赤坂區田町二ノ一一
出版會會員登錄番號一三六五〇〇
振替口座東京二二一一二番
電話赤坂 (48) 二五九一番
四〇四九番

991
98

終